



2020年10月

[編集・発行]

上内田地区まちづくり協議会 広報部

No. 5

広報

# ふれあい 上内田



昭和30年度  
紅組卒園児



昭和30年度白組卒園児

【特集】上内田幼稚園

頌徳碑 ～上内田に縁のある2人の俳人～

ふる里再発見〈第5回〉上板沢

編集後記

上内田幼稚園  
初年度卒園生  
(紅組・白組)  
昭和24年生まれ



# 上内田幼稚園

(昭和30年～平成17年)

子隣からの道は、昔この幼稚園の脇を通ったそうです。「くりばらふんであしはいたさわ」というざれ歌がありますが、檜坂トンネルができる前は山越えをしていました。昭和30年、ここにあった避病舎（結核患者等療養所）跡に上内田幼稚園が作られ、50年間園児たちに楽しい思い出と友情を育んでくれました。



昭和30年頃



ここから社会に飛び出した!!



園庭に大きな木(くすのき)があり、冬にはお弁当をストーブの所で温めて食べた思い出があります。  
昭和36年度卒園生



七夕飾りを作った事やクリスマスにケーキを食べたこと、おやつの肝油が楽しかった事、宮川先生に大きな声を出して怒られた事、いろいろな楽しかった幼稚園の思い出。今でもはっきりと覚えています。  
昭和39年度卒園生



みんなで乗れる船みたいな大きなシーソーがあって毎日あそびました。保育室ではとてもかわいいリスを飼っていました。  
昭和49年度卒園生



楽しい思い出の数々



平成17年頃

私は幼稚園が大好きでした。毎日友達や先生と折り紙や絵を描いたり、どろ山で遊んだりしてとても楽しかったです。  
平成8年度卒園生

今は上内田地区福祉協議会です。





しょう とく ひ

# 頌徳碑 ～上内田に縁のある2人の俳人～

上板沢公会堂に建つ頌徳碑、その碑の人物鈴木伊平氏（俳号：鈴木暉完）、そして氏の薫陶を受けた松本一太郎氏（俳号：松本素月）についてご紹介します。

板沢龍谷寺前の上板沢公会堂の中庭には、鈴木伊平頌徳の碑が立っています。鈴木伊平先生は、地区の人々にとって忘れることのできない村の恩人でした。



鈴木伊平氏

先生は二宮尊徳遵奉者、倉真村出身の元文部大臣岡田良平氏が社長を務める『大日本報徳社』の教師として、毎週自宅（板沢上組報徳社）に村の人々を集めて報徳訓を説きました。又、俳句をよく詠み、浜松在住の松島十湖を師として、村の青年に俳句の指導もしていました。

ご子息の文太郎さんは学校の教師であり、東京に転勤になったことから、奥様を亡くされた先生は昭和3年4月にご子息のいる東京羽田に転居され、同年9月羽田にて御逝去、10月3日板沢にて本葬が営まれたとの事です。

『頌徳碑』は大正7年に村人により建立されたそうです。



板沢公会堂の碑

そして昭和56年6月には、鈴木伊平の流れを継ぐ栗田奇峯以下、松本素月、角皆夢才、角皆輝笠、鈴木久山らにより追善の句碑が建てられました。除幕式では龍谷寺の佐藤泰仙和尚司会の元、龍頭院の先代川口良寛和尚が導師となり、開眼供養の読経が朗々と山内に読み上げられたそうです。鈴木伊平氏がいかに長きにわたり村の人々の尊敬を集めていたかを物語っています。



伊平氏追善の句碑

又、発起人の松本一太郎氏（俳号素月）は、その時にお土産として、河出書房から刊行された芥川賞作家八木義徳氏の創作集「一枚の絵」を列席者に差し上げました。この本に収められた「傘寿」（さんじゅ）という題の作品は、一太郎の半生をモデルにしたもので、しかも作中に松本一太郎が本名のまま登場しているので一同びっくり。又、偶然にも川口良寛和尚は八木義徳氏を知っており、会場で八木氏の人柄を紹介してくれたそうです。

鈴木伊平氏追善の句碑の中に松本素月の句があります。

## 青田山 青葉のもゆる 龍谷寺

素月の著作の五冊の中の「夕紅」は、氏の若き日の「氏が浜松の足袋工場に工員として勤めていたとき、近くの織物工場で女工をしていた長畑もと子（素子）と知り合い、やがて恋に落ちて、将来の結婚を誓い合いながら、生活の貧しさ、それに双方とも家の跡取りの長男と養女という関係から結婚という実を結ばずに別れわかれとなるが、長畑もと子もまた流転の末、二十歳で自殺する」という悲恋でありました。それは八木義徳氏によって「傘寿」という小説となっています。

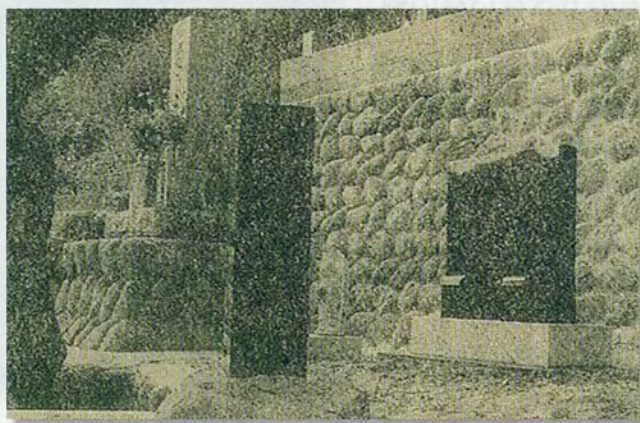


松本一太郎氏（素月）

素月の著作  
掛川市中央図書館蔵



松本一太郎氏は故郷の菩提寺、上板沢龍谷寺の墓地に自身の句碑と並んで、生涯を土に生きた両親のために歟塚【くわづか】を建立して、両親の恩に報いました。さらに松本氏は悲恋に終わった長畑もと子の墓を山梨県の奥深い山村に訪ねて、ねんごろな供養をし、昭和63年の秋、娘時代「梅花」という俳号で俳句を作っていたもと子のために、一对の句碑を京都嵯峨野小倉山弘源寺の墓苑に作りました。松本一太郎氏は俳号松本清月と名乗っていましたが、素子亡き後、素子の「素」を取って俳号を松本素月としました。(素月とは明るくさえわたった月の意味。)そして、素子亡き後65年目にして素子の実家の了解を得て、松本家の位牌に「芳容妙薫新女」と川口良寛和尚に頂いた戒名を入れ、2人は結ばれたとのこと。 (青田山から天に吐かれた素月が早春の訪れを告げる梅花を照らすようです。)



龍谷寺の歟塚と句碑



京都嵯峨野弘源寺の句碑

## 総持寺の素月句碑



総持寺内の素月句碑

松本素月が住んだ横浜市鶴見区には、石原裕次郎のお墓がある事でも有名な『曹洞宗大本山総持寺』があります。大きな樹々に囲まれた参道を歩くのは、どの季節でも気持ちの良いものです。この参道の先にある山門をくぐって左側にある階段を登ると鐘楼があります。そしてその右側には芭蕉の座像が刻まれた、大きな碑が建っています。

さて、この碑の前で詠まれた句があります。

諸嶽山 芭蕉の句碑に  
紅葉散る 素月



総持寺の芭蕉座像と句碑

作者は青田トンネルふもとの屋号「青田」松本家の松本一太郎氏(素月)です。30歳で上内田を離れ、苦労を重ね昭和40年、一太郎65才の時には、鶴見駅ビルにある茶舗「松本園」を開店(現在は鶴見駅近く)し鶴見区長も長く務めました。松本園は、素月には子どもが無かった為に姪御さん夫婦が継がれたということです。素月は平成4年に93歳で亡くなりましたが、90歳までは店に顔を出していたそうです。



# ふる里再発見

## 第5回

# 上板沢

今回は上板沢区祭典の歴史と「子供のお日待ち」についてご紹介します。

### 上板沢区 祭典の歴史



戦前、氏神である諏訪神社の大祭に合わせて、青年団を中心に子供達と寸劇等の芝居を催したり、商売芸人を呼び演芸会を行ったりしていました。終戦後昭和21年11月3日、新憲法発布記念行事として当時の青年団衆により、掛川市中町区の子供屋台を借りて引くことになりました。



昭和28年に塩町の屋台新造計画があったため、塩町の旧屋台を譲り受け、本格的な太鼓の打ち方等を塩町の祭青年より伝授され、また、法被等も揃えました。以後毎年大祭には引き廻されましたが、老朽化が進み数年間は休むこととなりました。



その後、ハナ屋台を借り引き廻しが行われた時期もありましたが、昭和50年代に入り各地区で新造屋台計画ができて引き廻されるようになりました。



当地区も新造計画が持ち上がり、昭和55年の秋、桜木の中村光雄氏の裏山の樹齢250年の桧を譲り受け、地元の(有栗田建築により建造し56年に完成。その後、彫栄堂の早瀬氏を頼り彫刻を施しました。30周年には大改修・彫金を施し、本年は屋台建造40周年を迎える事となりました。



### 現屋台年表

- 昭和55年 ● 桜木 中村氏の裏山の樹齢250年桧を購入
- 56年 ● 屋台新造／万灯新造 ● 屋台小屋新築
- 平成 2年 ● 屋台建造10周年 彫刻：彫栄堂 ● 2代目万灯新造
- 18年 ● 現屋台小屋新築
- 22年 ● 屋台建造30周年 平成の屋台大改修 ● 現万灯新造・彫金
- 令和 2年 ● 屋台建造40周年







## 子供のお日待ち



上板沢区では毎年、秋分の日の子供のお日待ち(食事会)が行われています。



その昔、延命地蔵という御地蔵様が板沢橋の近くにあつて、この前を行き来する旅人や村の人たちを何時も見守ってくれていたとのこと。その延命地蔵が祀られている青田山・龍谷寺で、明治17~18年頃から青少年の健全と育成の願いもこめて、子供のお日待ちが行われるようになったといわれています。

お日待ちの日には、龍谷寺境内の御地蔵様の祀られているお堂で上板沢区民の有志によりお念仏も行われています。終戦後、食糧難により一時休んだ時期もありましたが、



区3役・組長・組当番が食事の準備をして現在も毎年9月に行われています。

### 編集後記

園児の頃、皆かわいいですね…と言っても先輩方ですが。お祭りも子供のお日待ちも楽しい故郷の思い出となり、皆さんいろいろな人生を歩んでいくのでしょうね。貧しい家庭で育っても、松本一太郎さんのように有縁の人々に深い謝念を持って過ごせるのはこの様な経験が沢山あるからでしょう。科学や物質だけの社会に捕らわれない豊かな心を持ち続けたいものです。松本一太郎氏(素月)の本が掛川市中央図書館には揃っています。ご覧になってみては如何でしょうか。

